

## 里帰り出産に関する研究の動向と課題

The Trends and the Future Subjects of the Research on the “Satogaeri Childbirth”

大賀 明子<sup>1)</sup>

Akiko Ohga

キーワード：里帰り出産、里帰り分娩、研究の動向、父親

Key Words：satogaeri childbirth, the trends of the research, father

### I はじめに

我が国には、妊婦が出産にあたり実家に帰って分娩することを意味する里帰り出産という慣行がある。「里帰り」という言葉は、元来他家に嫁いだ新婦がはじめて実家に帰ることをさした。戦後の「家」制度は「夫婦家族」単位へと変化し、婚姻習俗としての「里帰り」意識は希薄化してきている。しかし、分娩前後の生活サポートを得るシステムとしての「里帰り出産」という言葉は一般的に用いられる用語として存在している。

里帰り出産はももとは出産に伴い妊産婦を労働力として期待できない時期の「口減らし」と母体の産後の養生が目的であったようだ<sup>1)</sup>。しかし、産業構造は変化し、核家族単位の生活が主流になり、生活スタイルが欧米化してきた。里帰り出産という慣行は、妊産婦が生家に戻って出産や産後の時期を過ごす現代的な「里帰り出産」として、現在もなお存在している。この慣行は、我が国では一般的な習慣として広く浸透しているが、夫婦が家庭の基本的な単位である欧米においては、夫婦が別々の場所で生活すること、その理由が出産であることを理解してもらうことは容易ではない。

「里帰り出産」が、いつ頃から始まったものであるかははっきりしていない。大村<sup>1)</sup>は、封建制度の完成によって、「嫁」という立場ができあがり、出産前後の期間、嫁は労働力としての価値が認められないこと、次代の生産力を生み出す役割に対する敬意と休養許可、および分娩・産褥・新生児に対する経費を実家に負担させる好都合とが「里帰り分娩」を定着させ、家父長制度が温存された明治・大正時代でも抵抗なく受け継がれてきたのではないかと述べている。

全国47府県の民族研究者に委託して行った大規模調査報告の資料である「日本産育習俗史料集成」<sup>2)</sup>によれば、産屋の場所に関する項目の中に、関東以北を中心に20県で「初産の時には里で出産する」という記述がある。近畿以南では「初産に限って実家に帰ってするものもある」(傍点加筆)というような表現が多くなる。

里帰り出産とその影響の検討においては、慣行として定着し続けている我が国の文化的な背景を理解した上でこれをとらえていくことが重要である。特に、我が国の里帰り出産の多くに伴う夫婦単位の生活の一時的な喪失、さらに新生児と父親の分離は、親役割の獲得や家族の発達という視点において注目に値する。

本稿では、我が国に存在する里帰り出産という慣行について、文献からその研究動向を概観するとともに、考察を通して今後解明が必要な課題を明らかにすることを目的とする。

なお、「出産」とは広く一般的に子どもを産むことや、子どもが生まれることをさす言葉であり、「分娩」とは、出産に対して医学的に用いる用語である。本稿では、「里帰り出産」と「里帰り分娩」はいずれも同じ意味を持つものとして用いるが、出産をする妊産婦やその家族において意味を持つ場合や一般的な里帰り出産(分娩)には「里帰り出産」を用い、医学的な意味において使用することが主たる場合には「里帰り分娩」を用いる。

### II 方法

#### 1. 検索対象とキーワード

里帰り出産に関する研究の動向を明らかにするために、医学中央雑誌および国立情報学研究所CiNiiがデータベース

Received : November. 30, 2008

Accepted : March. 4, 2009

1) 横浜市立大学医学部看護学科母性看護学領域

として収録している文献を対象に検索を行った。検索対象は、医学中央雑誌が1983年から2009年1月6日までにweb版に収録中の6,660,484件、またCiNiiは2009年1月6日現在web上で検索可能な11,991,038件である。

「里帰り出産」や「里帰り分娩」をひとまとまりのキーワードとして設定した検索結果の方が、「里帰り」に加え、「分娩」または「出産」という別々の単語に条件を設定して検索した結果よりヒット数が多かった。そのため検索時のキーワードは、「里帰り分娩」および「里帰り出産」と設定した。

## 2. 検索結果と対象文献

「里帰り分娩」または「里帰り出産」というキーワードで抽出できた文献は160件存在した。このうち、87件がデータベース上で原著に分類され、タイトルに「里帰り」というキーワードを含まない文献は45件、含む文献は42件であった。本稿ではこの42件を里帰り出産に関する研究動向を概観する対象文献とした。

表1 里帰り出産をテーマに掲げる\*研究

発表年	報告者	タイトル	内 容
1982年	松橋一雄, 他 <sup>39)</sup>	妊娠後期における胎児管理法 特に当科における里帰り分娩と妊婦・胎児管理について	胎児管理法
1982年	島田啓子, 他 <sup>41)</sup>	里帰り分娩で子癇発作を繰り返す患者の看護	症例報告
1983年	村山郁子 <sup>37)</sup>	里帰り分娩者の精神状況について	里帰り出産群の性格的傾向
1983年	野村雪光, 他 <sup>3)</sup>	里帰り分娩における親子関係	解説
1984年	川出恵美子, 他 <sup>26)</sup>	里帰り分娩の現状	地域単位の実態調査
1985年	杉内佐栄子, 他 <sup>15)</sup>	築地産院における里帰り分娩の実態調査について	施設単位の実態調査
1986年	加藤忠明, 他 <sup>27)</sup>	里帰り分娩の実態調査	地域単位の実態調査
1986年	高橋克子, 他 <sup>16)</sup>	当科における里帰り分娩の問題点	施設単位の実態調査
1986年	大上公子, 他 <sup>17)</sup>	当院における里帰り分娩の実態	施設単位の実態調査
1986年	石田道雄, 他 <sup>18)</sup>	当科における里帰り分娩の現状	施設単位の実態調査
1987年	海老原志づ子, 他 <sup>28)</sup>	稲城市における里帰り分娩	地域単位の実態調査
1987年	野村雪光, 他 <sup>4)</sup>	里帰り分娩における親子関係	解説
1987年	瓢風須美子 <sup>36)</sup>	里帰り分娩が家族の発達課題の達成に及ぼす影響 都市における調査成績をとおして	里帰り出産と家事育児
1988年	大村清 <sup>5)</sup>	[社会医学的にみたハイリスク妊娠] 里帰り分娩にみられるリスク	解説
1988年	木原香織, 他 <sup>19)</sup>	県立新庄病院産婦人科における里帰り分娩の実情	施設単位の実態調査
1989年	谷政明, 他 <sup>20)</sup>	広島赤十字・原爆病院における里帰り分娩の臨床統計	施設単位の実態調査
1989年	高橋裕, 他 <sup>21)</sup>	里帰り分娩の問題点 胎児情報の面から	施設単位の実態調査
1989年	成本明子, 他 <sup>22)</sup>	当院における里帰り分娩の現状 過去5年間の分娩数から	施設単位の実態調査
1990年	村山郁子 <sup>6)</sup>	里帰り分娩の保健指導	解説
1990年	山田恵三 <sup>7)</sup>	里帰り分娩 送り出す側の留意点	解説
1990年	加藤忠明, 他 <sup>8)</sup>	里帰り分娩の現状	解説
1990年	吉田至誠, 他 <sup>9)</sup>	里帰り分娩を受け入れるにあたって	解説
1990年	大村清 <sup>10)</sup>	正常妊娠の管理 里帰り分娩 社会的事項を中心に	解説
1990年	瓢風須美子 <sup>40)</sup>	現代韓国出産事情 里帰り出産の面接調査から	韓国の事例
1990年	大村清 <sup>1)</sup>	里帰り分娩 社会的事項を中心に	解説
1990年	鈴木博, 他 <sup>29)</sup>	首都圏からの里帰り分娩	地域単位の実態調査
1991年	岡本将器 <sup>11)</sup>	里帰り分娩への保健指導	解説
1991年	大坂暢子, 他 <sup>30)</sup>	首都圏からの里帰り分娩について	地域単位の実態調査
1991年	郷祖京子, 他 <sup>23)</sup>	里帰り分娩の現状と問題点	施設単位の実態調査
1991年	野村雪光, 他 <sup>12)</sup>	周産期医学 母子保健 里帰り分娩の最近の動向	解説
1992年	木村久美子, 他 <sup>13)</sup>	里帰り分娩の最近の動向	解説
1993年	岡根真人, 他 <sup>14)</sup>	里帰り分娩の問題点 母体搬送との関連について	解説
1993年	宮脇節, 他 <sup>24)</sup>	当院における里帰り分娩の実態	施設単位の実態調査
1994年	吉満桂子, 他 <sup>25)</sup>	里帰り分娩後の褥婦の問題に関する実態調査 里帰り分娩の継続看護を目指して	施設単位の実態調査
1997年	加藤春子, 他 <sup>31)</sup>	里帰り分娩に対する一考察 網走管外からの里帰り分娩を通して	社会面を含む地域単位の調査
1998年	古家純, 他 <sup>38)</sup>	里帰り分娩における妊娠期からの父性意識向上への援助	ケアの工夫
1998年	大島美由紀, 他 <sup>32)</sup>	父性意識の発達に影響を及ぼす要因の検討 地元分娩・里帰り分娩に焦点を当てて	社会面を含む地域単位の調査
2002年	森田せつ子 <sup>33)</sup>	里帰り出産における夫婦の里方との関係	社会面を含む地域単位の調査
2002年	大林一恵, 他 <sup>43)</sup>	母性看護領域にみる里帰り分娩に関する研究の動向と今後の課題	研究文献の概要
2003年	木村恭子, 他 <sup>34)</sup>	出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響 (5) - 里帰りとの関連 -	社会面を含む地域単位の調査
2005年	大賀明子, 他 <sup>35)</sup>	周産期における生活実態からみた「里帰り出産」	社会面を含む地域単位の調査
2008年	小林由希子, 他 <sup>42)</sup>	出産に関わる里帰りと養育性形成	子育て支援システムの評価

※ 1983年以降の医学中央雑誌 web 版 CiNii 収載文献のうち「里帰り分娩」または「里帰り出産」をタイトルに含み原著に分類されるもの

### Ⅲ 結果

「里帰り分娩」または「里帰り出産」というキーワードで抽出できる原著論文のうち、タイトルに「里帰り」を含む42件の文献は表1のごとくである。

#### 1. 発表年次と発表数

文献の発表年は1982年から2008年で、1990年の8件が最も多く1986年と1991年が4件で、他は1件から3件であり、1995年、1996年、1999年、2000年、2001年、2004年および2006年、2007年は発表がなかった。

#### 2. 研究内容

研究の内容は、里帰り分娩に関する内容を解説したもの<sup>1) 3) 14)</sup> 13件、施設単位の里帰り分娩について医学的側面から実態を報告したもの<sup>15) 25)</sup> 11件、地域単位の里帰り分娩について医学的側面から実態を報告したもの<sup>26) 30)</sup> 5件、地域単位の里帰り出産について医学的・社会的側面から実態を報告したもの<sup>31) 35)</sup> 5件の他、施設単位の里帰り出産について社会的側面から実態を報告したもの<sup>36)</sup>、施設単位における里帰り出産について夫婦の性格傾向を報告したもの<sup>37)</sup>、里帰り出産を選択する対象の父性意識を高めるためのケアの評価を報告したもの<sup>38)</sup>、里帰り分娩を行う妊婦の胎児管理を報告したもの<sup>39)</sup>、里帰り出産に関して韓国の事例を報告したもの<sup>40)</sup>、症例報告の特性に里帰り出産が上げられていたもの<sup>41)</sup>、里帰り出産を子育て支援システムから評価したもの<sup>42)</sup>、および里帰り出産に関する研究文献の概要を報告したもの<sup>43)</sup>がそれぞれ1件ずつ存在した。

すなわち、里帰り分娩、里帰り出産をテーマに掲げた研究の多くは、里帰り分娩に関する医学的側面からの実態を調査報告したもの<sup>15) 24) 26) 30)</sup> および、それらを用いた解説<sup>1) 5) 8) 14)</sup>であった。これらの筆頭著者の多くは所属から医師であることが推測でき、それゆえ、当然のことながら研究者の関心は里帰り分娩の医学的影響に向かう。しかし、実態調査を報告する文献の発表年をみると、里帰り分娩に関する医学的側面のみを中心とする実態報告は、1993年の報告<sup>24)</sup>が最後であった。この報告以降の実態報告はすべて社会的側面を含むものとなり、研究者の里帰り分娩の影響に関する関心は拡大していた。

社会的側面として調査されていたのは、新生児訪問指導の実施状況など育児指導と居住地に帰ってからの心配ごと<sup>31)</sup>、父性意識の発達への影響<sup>32)</sup>、生家からのサポートの内容など夫婦の家族との関係<sup>33)</sup>、生活実態<sup>35)</sup>であり、これらと里帰り出産との関係解明を試みていた。「里帰り出産」と父親に関する内容では、周産期の生活実態<sup>34)</sup>里帰り出産による夫・父親との別居生活の実際と家族関係への影響<sup>11)</sup>、里帰り出産が夫の家事・育児関与におよぼす影響<sup>25) 36)</sup>が存在した。

### Ⅳ 考察

#### 1. 里帰り出産に関する研究の流れ

タイトルに「里帰り」を含み、原著論文として分類されている文献の3割は「里帰り分娩」や「里帰り出産」に関する解説であり、新規性を有する研究論文ではなかった。これらの解説は、地域や施設における里帰り分娩に関する調査結果をふまえ、著者の経験的な知見を述べたもの<sup>1) 8) 10) 22) 30) 37) 42)</sup>が多く、同一の著者による報告も認められた。

里帰り出産は、1970年代から増加し始め問題視されてきた。医師や助産婦など出産を扱う専門職もこの問題を取り上げ、1977年の日本母性衛生学会学術集会は「里帰り分娩」に関するシンポジウム、1980年には「里帰り分娩」をテーマとしたパネルディスカッション<sup>44)</sup>を企画した。1980年代を中心とする報告は、里帰り出産が妊産婦ケアの上で様々な社会的問題を引きおこしたというものが多く<sup>20) 31) 45) 46)</sup>、周産期の妊婦管理の側面からは、奨励しないシステムとしている。しかし、里帰り分娩は存在し続け、結果に示したように研究者はそれぞれの医療機関を中心に実態調査を行っている。また、里帰り分娩や里帰り出産をテーマに掲げる研究は、医学的影響を論議する視点から社会的視点を持つ内容へと広がり、妊産婦や家族にとって里帰り出産がもたらす影響を解明する方向にある。

#### 2. 里帰り出産という概念の曖昧さ

品川<sup>55)</sup>は、里帰り分娩は「里帰り」の拡大として存在するものであるが、自宅分娩がほとんどなくなった現在において実際には「実家」または「その近くの医療機関で分娩すること」であるという解釈を示した。加えて、仮に隣の実家に帰ったとしても「里帰り」になりうるような曖昧さを含んだ言葉であるとして、(1) 相当の長途・長時間の旅行をして、妊婦が実家ないしはそれに準ずるところに帰り、その近くにある医療機関で分娩する。(2) 妊娠の経過を観察していた医師・助産婦と分娩を取り扱う医師・助産婦とがまるっきり変わる。(3) 妊娠の末期から分娩・産褥期にかけて妻と夫が相当期間、離ればなれになって暮らす。という3条件を含む場合を「里帰り分娩」とであると定義づけた<sup>45)</sup>。1980年のこの里帰り分娩の定義を引用する文献は比較的よくみられる<sup>5) 13) 20) 46)</sup>。しかし多くの文献では、「里帰り群」を明確に定義しないまま、あるいは文献中にそれが読み取れないまま独立変数として用いていた。

里帰り分娩をいくつかのパターンに分けて報告した研究<sup>35)</sup>は、①妊婦が自宅を離れた時期。②分娩場所。③退院先。④妊娠中から分娩後までの父親と新生児との生活状況。⑤自宅への帰宅時期。⑥父親と新生児の接触頻度。という6つの条件から里帰り出産を規定した。

データベースの検索で、「里帰り分娩」を単語にして行った検索結果の方が単独のキーワードよりヒット数が多かった結果は、里帰り分娩という言葉が社会的慣習として定着

していることを示す。そのためにかえってこの用語が示す現象や概念を曖昧にしたままでも使用できてしまう可能性がある。今後は、どのようなケースを「里帰り群」とするのかを明確に規定した上で調査を実施することが重要である。

### 3. 里帰り出産に関する今後の研究課題

木村<sup>34)</sup> は分娩 4 週後の対象に調査を行い、里帰りを選ばなかった父親の方が里帰りを選択した父親に比べてお産時の協力、母親の生活変化の理解、育児参加、父親としての実感が高く、里帰りを選ばなかった母親の方が夫に対する気遣いが高い結果を示した。小林<sup>42)</sup> は里帰り出産というシステムを養育性という視点から評価し、母親にとって初めての子育てと母と娘の関係発達に寄与する場、養育性形成に関わる場となりうる可能性を述べている。里帰り出産の医学的・社会的側面から実態を報告した研究において、特に里帰り出産に伴う夫婦単位の生活の一時的な喪失や新生児と父親の分離について具体的に注目した研究は存在しなかった。里帰り出産がおよぼす影響のうち、親役割の獲得や家族の発達という視点に関する研究的な取り組みは、今後の課題であると言える。特に父親との接触頻度に関する資料はなく、里帰り出産による実際的な父親との別居状態は明らかにはなっていない。父親からの視点による里帰り出産というシステムの評価も今後の課題であると言える。

## V まとめ

日本に存在する里帰り出産という慣行について、文献検索とその考察から以下のことを明らかにした。

1. 里帰り分娩、里帰り出産をテーマに掲げた研究の多くが、里帰り分娩に関する医学的な側面からの実態を調査報告したものおよび、それらを用いた解説である。
2. 里帰り分娩に関する医学的側面からの実態調査は、里帰り出産の社会的側面を含む調査へと拡大している。
3. 里帰り出産という言葉は社会的慣習の中で定着しており、研究実施においては専門用語としての概念規定や条件設定を明確にして用いる必要がある。
4. 里帰り出産がおよぼす影響のうち、親役割の獲得や家族の発達に関する研究成果の蓄積は少ない。とりわけ、父親にとっての里帰り出産という視点からの研究成果は十分ではなく、今後解明が必要である。

## 文 献

- 1) 大村清：里帰り分娩—社会的事項を中心に，周産期医学. 20 (臨時増刊号): 503-508, 1990.
- 2) 恩師財団母子愛育会編：日本産育習俗史料集成. 第一法規出版，東京：181-193, 1975.
- 3) 野村雪光，河村豊，品川信良：里帰り分娩における親子関係，周産期医学. 13 (12): 2176-2179, 1983.
- 4) 野村雪光，後藤高志：里帰り分娩における親子関係，助産婦. 41 (3): 14-20, 1987.
- 5) 大村清：〔社会医学的にみたハイリスク妊娠〕里帰り分娩にみられるリスク，周産期医学. 18(3):373-380, 1988.
- 6) 村山郁子：里帰り分娩の保健指導，ペリネイタルケア. 9 (1): 27-36, 1990.
- 7) 山田恵三：里帰り分娩送り出す側の留意点，ペリネイタルケア. 9 (1): 22-26, 1990.
- 8) 加藤忠明：里帰り分娩の現状，ペリネイタルケア. 9(1): 9-14, 1990.
- 9) 吉田至誠，伊達順子，酒井マユミ：里帰り分娩を受け入れるにあたって，ペリネイタルケア. 9 (1): 15-21, 1990.
- 10) 大村清：正常妊娠の管理 里帰り分娩 社会的事項を中心に，周産期医学. 20 (1): 59-64, 1990.
- 11) 岡本将器：里帰り分娩への保健指導，助産婦. 45 (8): 18-22, 1991.
- 12) 野村雪光，平岡友良，吉田秀昭，他：「里帰り分娩の最近の動向」，周産期医学. 21(臨時増刊号):691-694, 1991.
- 13) 木村久美子，野村雪光，平岡友良，他：里帰り分娩の最近の動向，健生病院医報. 18 : 28-32, 1992.
- 14) 岡根真人，宗田聡，藤田佳世，他：里帰り分娩の問題点 母体搬送との関連について，周産期医学. 23 (2): 281-284, 1993.
- 15) 杉内佐栄子，他：築地産院における里帰り分娩の実態調査について，東京都衛生局学会誌. 75:148-149, 1985.
- 16) 高橋克子，高橋あけみ，大沼富子：当科における里帰り分娩の問題点，山形県立病院医学雑誌. 20(1):139-142, 1986.
- 17) 大上公子，三谷美笑子，高橋美津子，他：当院における里帰り分娩の実態，岡山県母性衛生. 3 : 52-54, 1986.
- 18) 石田道雄，小川弘良：当科における里帰り分娩の現状，日本産科婦人科学会新潟地方部会会誌. 40:48-51, 1986.
- 19) 木原香織，倉林由美代，上原茂樹：県立新庄病院産婦人科における里帰り分娩の実情，山形県立病院医学雑誌. 22 (2): 30-34, 1988.
- 20) 谷政明，志田原睦雄，滝口洋司：広島赤十字・原爆病院における里帰り分娩の臨床統計，広島医学. 42 (2): 167-171, 1989.
- 21) 高橋裕，内海透，真田広行：里帰り分娩の問題点，—胎児情報の面から—，周産期医学. 19(8):1157-1160, 1989.
- 22) 成木明子，荒木陽子，山下一江，他：当院における里帰り分娩の現状 過去 5 年間の分娩数から，平田市立病院年報. 6 : 56-58, 1989.
- 23) 郷祖京子，岸英子：里帰り分娩の現状と問題点，日本看護学会集録. 22回母性看 : 176-178, 1991.
- 24) 宮脇節，熊谷修，宮西真理子，他：当院における里帰

- り分娩の実態, クリニカルスタディ. 14 (8): 768-771, 1993.
- 25) 吉満桂子, 松崎弘子, 和田峰子, 他: 里帰り分娩後の褥婦の問題に関する実態調査 里帰り分娩の継続看護を目指して, 日本看護学会集録. 25回母性看護: 5-7, 1994.
- 26) 川出恵美子, 北口章子, 鈴木ゆかり: 里帰り分娩の現状, 川崎市立川崎病院院内看護研究集録. 39: 72-78, 1984.
- 27) 加藤忠明, 斉藤幸子, 加藤則子, 他: 里帰り分娩の実態調査, 小児保健研究. 45 (1): 32-36, 1986.
- 28) 海老原志づ子, 石田操, 佐藤信子, 他: 稲城市における里帰り分娩, 産婦人科の世界. 39 (1): 45-49, 1987.
- 29) 鈴木博, 葛西真由美, 佐藤健, 他: 首都圏からの里帰り分娩, 岩手県立病院医学会雑誌. 30 (2): 89-95, 1990.
- 30) 大坂暢子, 川村泰香, 築部典子, 他: 首都圏からの里帰り分娩について, 母性衛生. 32 (3): 342-349, 1991.
- 31) 加藤春子, 安東京子: 里帰り分娩に対する一考察 網走管外からの里帰り分娩を通して, 母性衛生. 38 (4): 389-395, 1997.
- 32) 大島美由紀, 山田裕子, 梅田久美子他: 父性意識の発達に影響を及ぼす要因の検討 地元分娩・里帰り分娩に焦点を当てて, 栃木母性衛生. 25: 44-47, 1998.
- 33) 森田せつ子: 里帰り出産における夫婦の里方との関係, 愛知母性衛生学会誌. 20: 15-23, 2002.
- 34) 木村恭子, 田村毅, 倉持清美, 他: 出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響 (5) - 里帰りとの関連 -, 東京学芸大学紀要6部門. 55: 123-131, 2003.
- 35) 大賀明子, 佐藤喜美子, 諏訪きぬ: 周産期における生活実態からみた「里帰り出産」母性衛生. 45(4): 423-431, 2005.
- 36) 瓢風須美子: 里帰り分娩が家族の発達課題の達成に及ぼす影響 都市における調査成績をとおして, 母性衛生. 28(1): 144-152, 1987.
- 37) 村山郁子: 里帰り分娩者の精神状況について, 新潟大学医療技術短期大学部紀要. 1 (1): 60-71, 1983.
- 38) 古家純: 里帰り分娩における妊娠期からの父性意識向上への援助, 健生病院医報. 24: 79-82, 1998.
- 39) 松橋一雄, 他妊娠後期における胎児管理法 特に当科における里帰り分娩と妊婦・胎児管理について, 母性衛生. 23 (2): 29-32, 1982.
- 40) 瓢風須美子: 現代韓国出産事情 里帰り出産の面接調査から, 助産婦雑誌. 44 (2): 131-139, 1990.
- 41) 島田啓子, 前田紀子, 浦山晶美: 里帰り分娩で子癇発作を繰り返す患者の看護, 臨床看護. 8 (11): 1677-1684, 1982.
- 42) 小林由希子, 陳省仁: 出産に関わる里帰りと養育性形成, 北海道大学大学院教育学紀要. 106: 119-134, 2008.
- 43) 大林一恵, 梶川法恵, 柳川真理, 他: 母性看護領域にみる里帰り分娩に関する研究の動向と今後の課題, 香川母性衛生学会誌. 2 (1): 34-39, 2002.
- 44) 品川信良, 野村雪光, 村山郁子, 他: ≪パネルディスカッション≫, 里帰り分娩, 母性衛生. 22(3): 30-31, 1981.
- 45) 品川信良・野村雪光: 里帰り分娩, 坂元正一 (編), 本多洋 (編集企画), 産婦人科MOOK12, 妊婦の管理と保健指導, 金原出版, 東京: 104, 1980.
- 46) 加藤忠明: 里帰り分娩の現状, ペリネイタルケア. 9(1): 9-14, 1990.